

## 1P147

## ICTを活用した小児看護学実習における学習効果の検討～オンライン実施による学習効果～

篠原 理恵、広瀬 京子

東京医療学院大学 保健医療学部 看護学科

## 【目的】

近年、文部科学省は、ICTを活用し遠隔教育による多様性のある学習環境や専門性および質の高い授業を求めている。COVID-19感染症の影響により実習方法（臨地・対面・遠隔等）が変化する中で、学生の学びの質を保障していくため大きな変換が求められている。そこで、ICTを活用した小児看護学実習におけるオンライン実施による学生の学習効果を検討した。

## 【方法】

対象：急遠隔実習となった学生50名（1グループ：10名×5）分析方法：オンライン実施の学習効果について、学生の参加観察、発表内容、記録用紙を用いて学習効果を検討した。倫理的配慮：学生へ口頭および書面にて同意を得た。実習内容：オンラインポートフォリオ作成（2事例10プロフィール、保育園、病棟を1連の流れで学べるプログラム）

## 【経過】

保育園実習：受け持ち児の成長・発達段階の特徴、保育園の日課、保健指導（オンライン：子ども役学生）、安全マップの作製等 病院実習：受け持ち児および家族のアセスメント、看護計画（オンライン：患児・家族役教員）、安全マップ作製、多職種連携等（オンライン：2回の合同カンファレンス、最終カンファレンス）を実施→評価→省察→修正を行いながら実施した。

## 【結果】

学生は、メンバー間ツールを活用し積極的な実習参加、学習時間の確保、興味関心が高い学習成果物量の増加、準備学習や振り返り学習の深度の差異、オンライン時の資料画面共有によるスムーズな発表展開などが確認された。保健指導時、学生は、発達段階に応じた子ども役になりきり楽しみながら参加していた。看護の実施時、学生は患児（役）の「いやだ」「泣く」などの反応や家族（役）の質問に困惑し、考えていたこと（計画）の通りに実施できずに関わりの難しさを実感していた。また、参加観察していた学生も同様に感じ、ディスカッション時「どのようにすればよかったのか」よりよい看護を考えていた。

## 【考察】

学生は、リアルタイムでメンバー間の理解状況の確認、より良い情報・学習内容の共有、場面・空間共有、臨地の疑似体験、教員と直接的なコミュニケーションおよびフィードバックによる効果的な学習効果が得られたと考える。一方、臨地で本来体験するリアルな子どもの反応、成長・発達の個性（多様性）、大人（家族、看護師、保育士、薬剤師など）と子どもの関わりなどが体験出来る工夫が必要であると考える。

## 1P148

## 多職種協働プレパレーションを目指したPMECスタッフ研修会の現状と課題—コロナ禍でのオンライン研修を通して—

平田 美紀、流郷 千幸、鈴木 美佐、村井 博子

聖泉大学

## 【背景】

子どもが受ける採血は身体的・精神的な苦痛が大きく、苦痛緩和のためにプレパレーションは重要である。しかし、すべての職種が協働したプレパレーションは実践できていない。そこで、多職種が協働して行うPMEC（子どもの採血・血管確保時の苦痛緩和：Positive Medical Experiences for Children）スタッフ研修会（以下、研修会）のプログラムを開発するため、デモを2019年度に開催した。2020年度は、コロナ禍によりオンライン研修として開催したのでその取り組みと課題を報告する。

## 【研修会の概要】

プロジェクトメンバーは大学教員、小児CNS、保育士・HPS、小児科医師で研修会の企画・運営・講師を担った。2020年度当初の予定では1日のスケジュールであったが、集合研修からオンライン研修に変更し、半日×2回に分け、チラシを作成し参加者を募った。

## 【オンライン研修会の内容】

開催：2020年11月、2021年1月。内容：1回目は子どもの権利、母子関係、プレパレーション、採血の手技に関する講義を行い、2回目は苦痛緩和の実践について外用局所麻酔剤の使用および母親が同席する採血場面に関する講義とグループワークを実施した。参加者：全国から1回目17名（医師、看護師、CNS、保育士、HPS）、2回目11名（看護師、CNS、保育士、HPS）。グループワークは少人数に分け、プロジェクトメンバーがファシリテータとなり進化した。終了後のアンケートでは、内容についてほぼ満足したと回答があり、「オンライン研修の機会があり今後の多職種連携につなげたい」「苦痛緩和の実践の講義は参考になった」「医師にもプレパレーションを知ってもらいたい」などの意見があった。

## 【考察】

PMECは医療者が苦痛緩和の方法を理解し実践できることを目指しており、研修会に関心がある医療者がオンラインによって全国から参加でき有意義であった。また、半日のスケジュールはオンラインとして適切であったと考える。講義では、プレパレーションの必要性の再認識や小児科医師から手技を学ぶことができ、参加者の学びが深まったと考える。グループワークは、ファシリテータを担うことでオンラインに不慣れな参加者も発言でき施設間の情報共有の場につながったと考える。今後も集合型研修にオンラインを併用する研修会の企画検討が課題である。